るものなり。而して完全乳嘴蜂窩開鑿術後に來る錐體症狀は化膿性腦膜炎の續發を豫知するものなる故、其症候を確認し得るならば錐體部手術により救命する事を得。尙開鑿術に際しては完全搔爬を究極の目的とし之により再手術も又豫防し得るものなり。卽ち現代耳外科學は完全乳嘴蜂窩鑿開術を基準として錐體尖端へ、或は迷路へと其の手術的體系を整へつゝあり。(小谷抄)

「チモフォーゲン」を應用したる咽喉結核の症例

山中幸造，柳內恒久

耳鼻咽喉科，12卷 11號，961頁

結核症に對する特殊治療劑として創製せられたる「チモフォーゲン」の吸入及び靜注による効果は相當認められつゝあり。著者等は咽喉結核7例に局所粘膜下注射を試みしに何れも好成績にして、特に咽頭結核に於ては內科的に甚だ重篤なる場合に於ても著しき治癒効果を示せり。注射方法は咽頭結核には可撓性長針を用ひ、喉頭にはブリューニングス氏喉頭「スパーテル」及び特製長注射器を使用し、浸潤、潰瘍型共に周圍を取卷きて行ふ。注射液濃度は 0.2% より始め副作用を考慮しつつ漸次 10% 位まで增加す。1回注射量は 2.0cc 以下とし、注射間隔は前注射の刺戟症狀消失せる時期にて大體7日位とす。治癒狀況は浸潤型にては注射後一時腫脹及弛緩性微發生ずるも次第に正常に復し、潰瘍型に於ては苔の消失後肉芽組織形成し瘢痕化す。發熱は割に考慮の要なきも喀血の危險なきものを適應とする。(渡部抄)

再歸熱再發株の研究 (XI)

第Ⅲ編　生體感染による觀察

Ⅲ床蟲體內に於ける再發株の感染力並に其株特殊性の持續に就て

山下　朝橋

皮膚科紀要 33卷 2號 昭和14年2月

「マウス」を用ひて床蟲體內に於ける再發株の感染力並に其株特殊性の持續に關する實驗の結果次の結論を得た。

1、吸血後床蟲體內に生存せる再發株「スピロヘーテ」は35日間を經過するも尙其感染力を失はず。

2、吸血後床蟲體內に生存せる再發株「スピロヘーテ」は35日間を經過するも尙其の特殊性に變化を認めしめず。(桑原抄)

腸「チフス」免疫に關する實驗的研究(Ⅱ)

大江　乙彥

同　誌

健康皮膚面より 1)種々の濃度の腸「チフス」菌「ワクチン」を種々の期間用ひて、「ワクチン」の濃度及び接種回數が抗體產生に如何なる影響を及ぼすか 2)腸「チフス」菌「ワクチン」を遠心沈澱して上淸を採り之を用ひて其吸收狀態を考ひて其に 3)腸「チフス」菌「ラノリン」軟膏を用究し，更の吸收により幾許の抗體產生を認むるかを檢索せんとした。(桑原抄)

Brown-Pearce 系癌腫の酵素學的研究(Ⅳ)

Brown-Pearce 系癌腫家兎の腫瘍、並に肝腎及睾丸の「カテプシン」(自己蛋白分解)に就て

森　義一

同　誌

片側睾丸に移植して得たる Brown-Pearce 系癌腫家兎を用ひ原發或は轉移腫瘍に於て腫瘍組織の老成變遷が腫瘍の自己蛋白分解性「カテプシン」作用に對し如何なる影響を與ふるや、且つ原發及轉移の各腫瘍「カテプシン」作用の相互の間に如何なる關係ありや、亦肝腎及原發腫瘍母組織である睾丸等に於ける自己蛋白分解性「カテプシン」作用が癌腫增殖による全生態的變遷經過に並行して如何なる消長をなすや之等の疑問を解決せんとして酵素作用の消長を實驗的に檢索した。(桑原抄)

海眞再歸熱の實驗的研究(Ⅳ)

感染海眞に及ぼす免疫家兎血淸の影響(1)

小林　樵夫

同　誌

奉天系原株再歸熱「スピロヘーテ」を海猴に接種感染せしめた後耐過再歸熱家兎免疫血清を以て之を他働的に處理し「アグロメラチオン」に由つて其結果を追究して次の結論を得た。

1、奉天系再歸熱「スピロヘーテ」を接種感染せしめた海猴に同株「スピロヘーテ」耐過家兎免疫血清を注射したが之に由つて該海猴に出現する「アグロメラチオン」効價に高低を生じた。

2、「アグロメラチオン」効價の高い血清を注射した感染海猴群に出現する「アグロメラチオン」効價は低く，「アグロメラチオン」効價の低い免疫血清を注射した感染海猴群には高い「アグロメラチオン」効果が出現した。

3、感染海猴に他働的に出現する「アグロメラチオン」効價は非感染對照海猴に比して概ね僅に低價であつた。

4、免疫血清の「アグロメラチオン」効果が低い場合は感染海猴に於ては他働的に「アグロメラチオン」効果は微價を以て出現し，感染對照海猴の「アグロメラチオン」効價出現と同時に高効價を呈したが，感染對照海猴の効價に比して稍低くかつた。

5、一般に「アグロメラチオン」効果の發現消長は試獣個體の差に由る僅微の變動ある事は免れない。

6、免液血清注射後24時間の感染海猴血液を「マウス」の腹腔内に接種し 6—13日に至る觀察を遂げたが「スピロヘータ」を證明し得なかつた。(桑原抄)

海猴再歸熱の實驗的研究(V)
感染海猴に及ぼす免疫家兎血清の影響(2)

小林 樵夫

皮膚科紀要 33巻 3號 昭和14年3月

奉天系再歸熱「スピロヘーテ」浮游菌液を種々の量に分ちて腹腔内に接種して感染せしめたる海猴に、同株「スピロヘーテ」耐過免疫家兎血清を等量宛腹腔内注射を施し海猴體内に發現する「アグロメラチオン」効果を測定し、一方此免疫血清注射後24時間に心臓穿刺により採取した血液を「マウス」に接種して殺「スピロヘーテ」作用が發揮せられたかを間接に檢し，且つ耳翼海猴血液を日々暗視野裝置下に鏡檢した。(桑原抄)

肺炎雙球菌の自働的免疫に關する實驗的研究、肺炎雙球菌I型菌の免疫に於て抗原の製法異なる事に因り此際成生せらるる凝集素の發現度及び其の消長の差異に就て

越智 昇一

同 誌

肺炎雙球菌を 100°C の高熱で1時間加熱し菌體を除去した上清液も免疫賦與能力を完全に保有し免疫効果に於ても 60°C 30分加熱「ワクチン」と大差なき事實を認めた、只同株免疫元の同量を以て處置しても動物の獨自の個性により免疫形成に相違を來すものである。(桑原抄)

Brown-Pearce 系癌腫の酵素學的研究(V)
Brown-Pearce 系癌腫家兎の腫瘍並に肝、腎、筋及睾丸の「ヂペプチターゼ」に就て

森 義一

同 誌

片側睾丸に移植して得た Brown-Pearce 系癌腫家兎を、其臨床的症狀並に病理解剖的見地から癌腫症初期群、中期群、末期、群の3群に分ち睾丸原發及肝、腎、淋巴腺轉移腫瘍の「ヂペプチターゼ」作用の腫瘍組織の老成變化(新鮮、過熱、壞死)に伴ふ消長を檢索し併せて肝、腎、筋、睾丸の「ヂペプチターゼ」量を測定して之が消長と全生態の癌腫症性變遷經過との關係を觀察した。(桑原抄)

Sarcosporidia に關する研究
罹患動物血清の補體結合反應並に沈降反應に就て

荒瀬 恒雄

皮膚科紀要 第33巻 第4號 昭和14年4月

豚寄生並に牛寄生の住内胞子蟲體抗原を以て豚、牛、馬血清につき補體結合反應並に沈降反應を行ひ次の結論を得た。